



2色チラシに適した 画像データの作り方

- ▶「チャンネル」機能を使って目的のデータをつくる
- ▶印刷しない色の振り分けの分量がカギになる
- ▶少しコントラストを強めにしないとぼけた画像になる

2色チラシでは画像処理がカギになる。処理を的確に行わないと、メリハリがないぼやけた印象のチラシになる。これは画像処理の技術に不備があるからだが、少しの技術アップで解決できる。そして、画像ばかりか、周囲の要素の処理にも原因があることがある。

画像処理では、ふたつ方法があり、その選択は時間的な余裕に左右される。確かかつ適正な処理方法では、使わない色をどう振り分け処理するかにかかっている。的確な処理をすれば、目的によっては多色チラシに負けないダイナミックなチラシができるし、費用削減にもなる大切な技術だ。

色選び

最初に、使用する色を選ぶ。注意したいのは、配色はカラーチャートで選んで確認することだ。モニターは配色を正確に反映するとは限らない。

2色印刷で使用する特色の組み合わせは、大きく4つに分けられる。



- ①
- DIC 155
 - DIC 213



- ③ 強調したい色が1系統の場合は補色関係の色を使わないで、スミを1色に、あとの1色を金赤、緑、青、黄色などの組み合わせると、1色がスミなので、画像も文字関係も引き締まったパンチのきいた仕上がりが得られる。

- K
- DIC 155



- ②
- DIC 155
 - DIC 255



- ④ 同系色あるいは同じような2色を使う場合は、ニュアンスに富んだ落ち着いた、しゃれた印象の仕上がりがなり、文字、ケイも色味を抑えてスッキリしたチラシになるが、使える場面は限られる。

- DIC 155
- DIC 160

金赤と、青、金赤、緑といった、補色関係かそれに近い、まったく異なる2色の組み合わせだ。

金赤・緑に分解した①は、肉の赤と野菜の緑が必要な生鮮食料品など、異なる2色を強調したい場合に有効だ。掛け合わせによる色のバリエーションを比較的豊富に表現できる。また、100%同士の掛け合わせで黒に近い色が表現でき、比較的色味のある仕上がりが得られる。ただし、版ズ

レの可能性を考えると、細目の線や9Q以下の小さな文字に掛け合わせを使わないほうがよい。

②の金赤・青に分解したものは、人物など、顔や肌が不健康に見えるので不向きだ。また、小さな文字に掛け合わせを使わないほうがよい。

なお、①~④については、色上質紙に特色で刷る方法でも同じような効果が得られるので、検討する価値が十分ある。

ダブルトーンとの違い



オフセット印刷の狭いレンジを補い、微妙な濃度表現を可能にする。この例では補色同士の配色を設定した。2色分解の時と同じ特色①で表現したが、まったく印象が異なる。
注：説明上、画像に補正をかけていない。

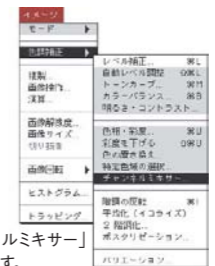
色を振り分ける技術

ここでは、赤が強い画像と、緑が強い画像を例に、プロセス版を作成して特色に置き換える方法を見てみよう。この方法ならば、印刷会社と打ち合わせなくてもよいが、刷り上がり状態ではないので、あくまで実務的な処理だ。

- 選んだ特色
- DIC 155
 - DIC 213



元画像

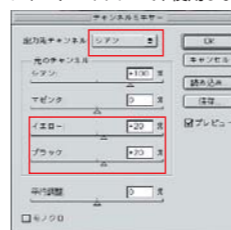


「チャンネルミキサー」を呼び出す。

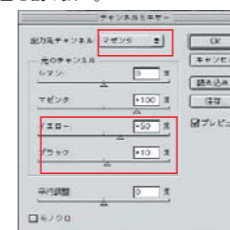


元画像

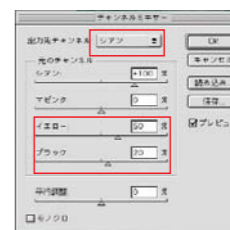
チャンネルミキサーで、使用しない色を割り振る。



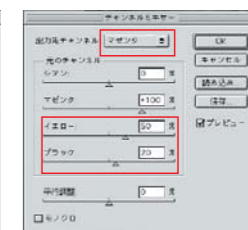
C版にYとKを割り振る。



M版にYとKを割り振る。



C版にYとKを割り振る。



M版にYとKを割り振る。

チャンネルで各版の状態を見て、使用しない色の分が全体に少なければ振り分け量は少なく、多ければ多めに振り分ける。



CとM版で構成された仕上がりが。

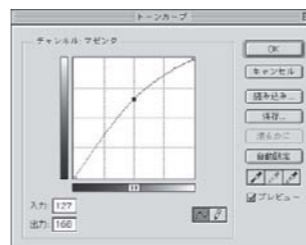
使わないチャンネルを削除する(YとK版)。



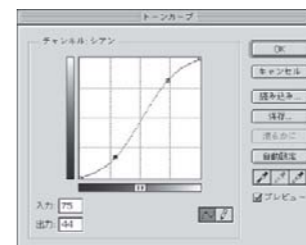
特色で印刷した仕上がりが。

トーンカーブで補正する

2色分解は色味が減った分、シャドウから中間調が浅くなるので補正が必要になる。



赤版(DIC 155)の中間部を明るくする。



緑版(DIC 213)を補正してややコントラストをつける。



補正後のCとM版。



仕上がりが